

小・中・都立学校

平成 7 年 度

教育研究員研究報告書

書 写

東京都教育委員会

平成7年度

教育研究員名簿（書写）

書写	地区	学校名	氏名
◎	千代田	番町小	品田裕子
	中央	城東小	皆川淑江
	江東	明治小	乾昌子
	杉並	桃井第二小	江刺淑子
	荒川	第九峡田小	山本利枝
	青梅	第2小	関根孝之
	府中	第三小	根岸厚
	町田	南つくしの小	高橋由美子
	台東	台東中	福沢美紀子
	大田	南六郷中	糟屋和美

◎=世話人 ○=副世話人

担当 教育庁指導部指導企画課指導主事 河野庸介
 教育庁指導部中学校教育指導課指導主事 新藤久典

目次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想 1 研究の基本的な考え方	2
	2 研究の方法と手順	2
	3 研究の全体構想図	3
III	研究の内容 1 <小学校低学年>	4
	2 <小学校高学年>	6
	3 <中学校>	8
	4 <「書写カード」>	10
	5 <練習用紙>	11
IV	実践事例 <小学校低学年>	12
	<小学校高学年>	16
	<中学校>	20
V	研究のまとめと今後の課題	24

研究主題

「自ら課題を見つけ、主体的に取り組むための書写指導法の研究」

I 研究主題設定の理由

これからの学校教育においては、社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成を図ることが求められている。社会の変化に主体的に対応できる児童・生徒を育成するためには、知識や技能を受動的に修得させるのではなく、自ら考え主体的に判断するとともに、表現したり行動したりすることのできる資質や能力の育成を重視する授業の展開が必要である。書写教育は、学習指導要領において国語科の言語事項に位置づけられている。小学校における国語科の目標は、「国語を正確に理解し適切に表現する能力を育てるとともに、思考力や創造力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」であり、言語の教育としての国語科の性格が明らかにされている。その言語に関心を持ち、書き方を学び日常に生かす力をつけるのが書写教育である。

前年度までの研究から文字を書くことにおける児童の実態として、形の整った正しい文字を見分ける能力に比べて、形を整えて書く能力が不足しがちであることが明らかになっている。また、整った文字を書きたいという意欲はあるがどのように書けば良いのか分からない、という実態も指摘されている。さらにノートには、終筆におけるとめ・はね・はらいなど基本の点画に注意が向けられていない文字、正しい筆順で書かれていない文字なども見られる。以上の実態から、毛筆書写による文字の基本の学習と硬筆書写との関連を図ることにより、書写の授業の改善を目指すことが大切であると判断した。さらに授業で学んだ成果が日常生活に生かせるよう工夫した。

そこで書写指導の目標を次のように設定した。

- ・文字を正確に理解し、形の整った正しい文字を丁寧に書く能力を育てるとともに、文字感覚を養い、文字に対する関心を深め、文字を尊重する態度を育てる。
- ・毛筆による書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うように指導する。
- ・硬筆による書写の指導は毛筆との関連を図りながら指導する。

さらに書写指導の目指す児童・生徒像を次のように考えた。

- ・自分の課題を持ち、主体的に解決できる児童・生徒の育成

(文字を正しく整えて書くための自己の課題に気づき、課題解決の方法が分かる。)

- ・身につけた書写力を日常に生かすことのできる児童・生徒の育成

本研究は内容的には3年目になる。本年度は研究課題を「自ら課題を見つけ、主体的に取り組むための書写指導法の研究」と設定し、研究を進めてきた。過去2年間では、課題を明確に意識させたり、学習意欲を持続させたりするための指導法の研究、視聴覚機器を取り入れた学習基準の提示方法の研究、発展学習の取り入れ方等を研究してきた。本年度は今までの研究成果を踏まえ、発達段階に応じた評価の工夫や、自ら課題を見つけ意欲を高めるための指導方法の工夫として「書写カード」と「練習用紙」を研究の重点として取り組んできた。

II 研究の構想

1 研究の基本的な考え方

これからの書写教育においては児童・生徒が自分の課題を見つけ、それを追究し解決する学習活動を重視する必要がある。本研究では、日常生活で自分が書いている文字は形の整った正しい文字かどうかを考え、そこから自分の課題を明確につかみ、どのようにすれば解決できるかを主体的に考えられるよう、指導の手立てを工夫した授業を創造する必要があると考えた。そこで、児童・生徒の文字への関心や意欲を高め、文字を正しく整えて書く能力を伸ばし、学習したことを日常の生活の中に生かしていこうとする児童・生徒を育てるために、次の方法に焦点をしばり研究を進めることとした。

(1) 自ら課題を見つけるために

一人一人の児童・生徒が個別の課題を見つけるためには、ねらい・学習の基準（文字の基準・書き方の基準等）が明確であることが重要である。学習の基準をはっきりとつかみ、自分の試し書きと照らし合わせることで、児童・生徒が自分の課題をはっきり理解できると考えた。そのためには、学習の基準の提示については、視聴覚機器等を用いることにより、児童・生徒が自分の課題をつかむための活動ができるよう工夫した。

(2) 主体的に取り組むために

児童・生徒が主体的に取り組むためには、学習の流れを理解して、見通しを持って積極的に活動できることが大切である。そこで、本時のねらい・試し書き・学習の基準・自己評価・まとめ書き等を取り入れた「書写カード」を導入することにした。また自分の課題にあった適切な練習用紙があれば、一人一人の児童・生徒が自分の課題にあう練習用紙を進んで選択し、意欲的に取り組むであろうと考え、練習用紙のあり方についても研究した。

2 研究の方法と手順

(1) 研究の組織と方法

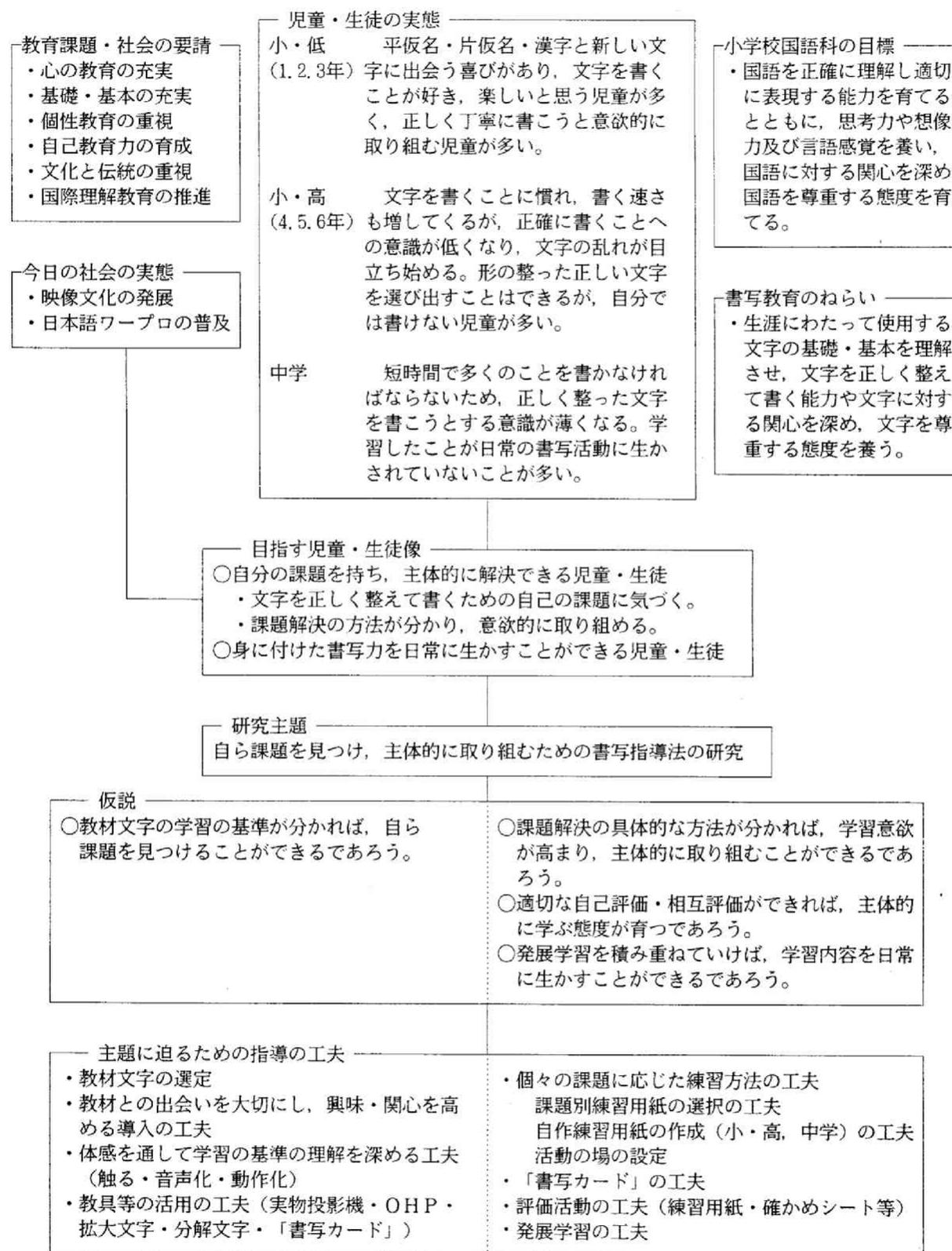
本年度の研究員は小学校8名、中学校2名の計10名である。そこで、小学校低学年分科会（2・3年）、小学校高学年分科会（4・5・6年）、中学校分科会の計3分科会を組織した。3分科会ともに硬筆指導と毛筆指導との関連を重視しながら研究を進めた。さらに、小・中学校の書写指導の関連や系統を踏まえ相互の連携を深めるよう配慮した。

(2) 研究の経過

1学期は研究員相互の平素の書写指導の実態について報告し合い、昨年度の成果や課題を踏まえつつ、研究授業を行った。また並行して本年度の研究主題や内容について話し合い、共通理解を深めるようにした。夏休みの御岳の研究集会では、1学期の研究授業を分析し、整理する中で、研究主題や内容について更に深めていった。2学期以降の指導計画を基に作成した学習指導案を全員が持ち寄り、授業における具体的な指導の手立てを検討し、主題に迫るための今年度の重点について検討した。その結果、2学期は練習用紙と「書写カード」を効果的に取り入れた授業を進めることとなった。

6月6日	中1年	楷書（点画の接し方）	9月8日	中1年	行書（丸みと連続）
6月27日	小6年	文字の中心	10月16日	小5年	文字の組み立て
7月4日	小2年	かん字のかきかた	10月31日	小4年	文字の中心

3 研究の全体構想図



Ⅲ 研究の内容

1 小学校低学年分科会（2・3年生）

2年生に進級するころになると、書写の力もつき、形の整った文字を速くしっかりと書くことができる児童が多くなっていく。またこの時期の児童は、学級での事前のアンケートからも明らかであるが、書写の時間が大好きである。自分の書いた文字に劣等感を持つことなく、“もっと上手になりたい”と書写の学習に意欲的に取り組む姿勢を見せている。3年生で毛筆が導入されてくると一層興味を持ち、児童は意欲を更に高め、積極的に取り組むようになっていく。

このような時期に、児童一人一人が「自ら課題を見つける」「主体的に学習に取り組む」態度を身に付けることは、生涯にわたりよりよい文字を書き進んでいく姿勢につながっていくと考えた。そこで、「自ら課題を見つける」「主体的に学習に取り組む」態度を育てるために、以下のような具体的な手立てを考えた。

(1) 自ら課題を見つけるために

一人一人が自分の課題を自らしっかりとつかむためには、文字の基準・ねらい・書き方などを明らかにする必要があると考えた。その中で特に、文字の基準を明確にすることが大切であると考え、下記のような点に配慮して指導した。

① 適切な教材文字を選定する

<2年>

学習のねらいを達成するのに適切な教材文字を、児童の実態に応じて選定した。この文字を学習することで、他の文字へ応用できることも併せて考えた。また、ねらいを一つにしぼり、他の要素に左右されず、文字の基準を明確にとらえることのできる文字を選んだ。

<3年>

基本点画の筆使いの学習が、重要な項目になっている。そこで、毛筆を用いて学習したことを硬筆に生かしていくために、基本点画の筆使いの学習がしやすい文字を選んだ。

② 体感させる

<2年>

ア 空書きの時に、音声化・動作化を取り入れる。

例 「しんにょう」

、ウン（とめる） 3 オレ・オレ（おれ） ～ スートン・スッ（右はらい）

イ 絵筆を使う。

鉛筆では実感できにくい部分を、使い慣れている絵筆を使って書くことで体感させる。

<3年>

ウ 分解文字を使う。

厚みのある紙で、教材文字の分解文字を作り、触ることを通して形を体感させたり、長さ比べをして画の長短をはっきりさせたりした。

③ 書き方を分かりやすい言葉で説明する

例 しんにょうの第3画

「ひくいすべりだい」

④ 視聴覚機器の活用

教材文字を提示したり，文字の基準を明確にする際に，児童の前で実際に示範し，視覚に訴える工夫をした。

⑤ 実態調査を生かす

日常生活で児童が書いている文字の中から，本時の目標に関連のある文字をあらかじめ調査しておき，それをもとに，授業での一人一人の児童の課題作り及び練習時の助言や机間指導に役立てた。

(2) 主体的に取り組むために

児童が主体的に学習に取り組むためには，この時間に，“何を学習するのか”“どう練習すればよいのか”について，児童一人一人が理解していることが大切であると考え，自分の課題を解決するための具体的な練習方法を知ることと，書いた文字を客観的に評価する力を育てる工夫をした。

① 「書写カード」の使用

このカードに，試し書き・学習のねらい・自分のめあて・まとめ書き・自己評価・応用などの欄を設け，1時間の学習の流れが分かるようにするとともに，自分のめあてを意識しながら学習に取り組めるようにした。

② 練習用紙の工夫

一人一人の課題に応じるような練習用紙を数種類準備し，それぞれが自分の課題に応じた練習用紙を選択するようにした。

<2年>

はじめは，一人一人の課題を把握して，どの練習用紙を使えばよいのか個別指導を積み重ね，次第に自分で選択できるようにした。種類別に色分けするなどの工夫もした。

<3年>

課題に応じて数種類の練習用紙の中から選ぶ。同じ練習用紙を何枚使ってもよいことにして準備した。

③ 評価活動の工夫

「書写カード」の中に，めあて・自己評価の欄を設け，意識しながら練習できるようにした。自分がめあてに沿って学習できたか，「確かめシート」などを使って，自己評価できるような工夫も取り入れた。また，時間の始め・終わりに試し書き・まとめ書きを行い，両者を比べることで1時間の学習の成果が自己評価できるようにした。

④ 発展学習の工夫

書写の時間に学んだことを，他教科の時間や連絡帳の記入など日常の文字を書く活動に生かしていくように，「書写カード」に，既習文字の中から同じ要素を含む文字を書き，意識化を図った。

2 小学校高学年分科会（4・5・6年）

低学年のころは、文字を正しく丁寧に書こうと意欲的に取り組んでいた児童も、学年が進むにつれて文字を書くことに慣れ、書く速さも増してくるが、正確に書くことへの意識が低くなり、文字の乱れが目立ち始める。また形の整った正しい文字を選び出すことはできても、自分では書けない児童が多くなる。

中学年から始まった毛筆の指導は、文字を大きくはっきりと書くため、文字の形を習得しやすいという利点がある。毛筆を主にして、書写の基礎・基本を身に付けさせるとともに、硬毛の関連を図りながら、以下のような指導の工夫をした。

(1) 自ら課題を見つけるために

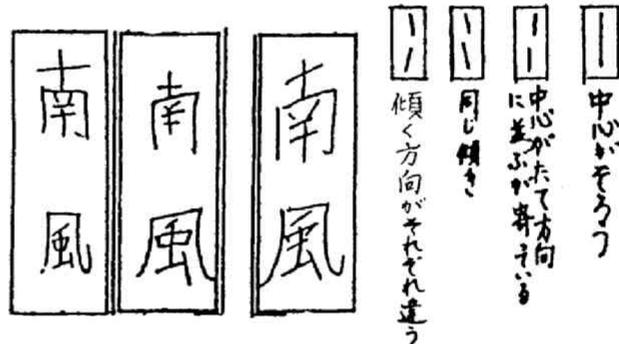
児童が自ら課題を見つけるために、高学年分科会では「学習の基準」を教師が教えるのではなく、児童自身に気づかせることに重点をおいて指導した。その具体的な手立ては以下のとおりである。

① 実態調査の活用

授業の前に毛筆や硬筆で教材文字、あるいはそれと同じ要素を持った文字を書かせた。

その調査をもとに、指導者は、あらかじめ児童一人一人の課題を把握することができた。このことは、児童の課題作りの支援に有効であった。

児童の実態



② 試し書きの活用

授業の導入の段階で、試し書きをさせた。児童は個々の机上で、試し書きと教材文字を比較し、問題点を発見した。児童の発表の中から学習の基準をつかませることにより自ら課題を把握できるようにした。

試し書き（硬筆）



③ 視聴覚機器の活用

毛筆指導において、実物投影機を用いて「学習の基準」の理解を図ったところ、OHPとは異なり、教材文字がテレビに鮮明に映ることや、示範の際に手元や穂先の通る様子がはっきりと映し出されるなどの効果がみられた。

④ 「書写カード」の活用

学習の基準が分かり、自分に取り組むべき課題が分かっても、1時間の授業の中でいくつもの課題に対処するのは不可能であるし、視点もぼやけてしまう。より効果的な活動を行うためには課題をしぼることが大切であり、それが個々の児童の課題を明確にすることになると考えた。ここでは、その手立てとして「書写カード」を用いた。自分が課題とするものを、○で囲ませたり、文章で記入させたりすることで課題をしぼり、明確化することができた。

(2) 主体的に取り組むために

児童が書写の学習に主体的に取り組むためには、自己の課題を明確に把握し、さらに課題解決への、具体的な方法が分かることが大切であると考え、練習用紙・「書写カード」を重点的に研究した。

また、練習して身に付けた書写力を、日常の硬筆の書写活動のなかに生かしていくことができるならば、児童の成成感は高まり、次の学習への取り組みもさらに意欲的になるのではないかと考え、発展学習にも配慮した。

① 「書写カード」

児童が、正しく整えた文字を書くために自己の課題を把握し、それに応じた解決方法を見つけていく学習過程の中で、自己の課題を見つけたり、課題を達成したかどうかを評価する手立てが必要になったりしたため、「書写カード」を試みた。

本時のねらい・試し書き・学習の基準・自己評価・まとめ書き・教材文字などを入れた「書写カード」を作成して指導してきた。カードに入れる項目は、その時の学習のねらいや内容に応じて工夫を加えてきた。

「書写カード」の中の教材文字に線を入れたり、文字に枠をとって相互の文字の大きさを調べたりしながら、学習の基準を把握した。そして、基準に照らしながら試し書きを見直し、自己の課題を明確にしていった。

課題にそって練習し、まとめ書きを自己評価や相互評価し、「書写カード」に記入することにより、試し書きと比べて成果を確認した。それによって、成成感を得たり、不十分なところはさらに練習しようとしたりして、次の時間の意欲づけにもなり、主体的な学習を促すのに効果があったと思われる。

② 練習用紙

自己の課題解決への具体的な方法として、練習用紙を選択させたり、自作させたりして使用した。段階的な練習用紙を、一教材において幾通りも用意し、自分の課題にあわせて選択し、また、同じ箇所を何度でも練習してもよいことにした。そうすることによって、自己の課題を進んで解決していこうという姿勢が強められた。

また、教材によっては、自分で練習用紙を作ることも、指導計画の中に取り入れてみた。文字の組み立てや大きさ・字配り・中心に関する練習用紙は、骨書き・始筆の位置・中心線・字形の枠など、児童もいろいろ工夫して作った。

③ 発展学習

毛筆書写のあとには、教材文字と同じ要素をもつ文字を選んで、硬筆で学習する活動時間を必ず設定した。また、字配りの学習のあとに、七夕の願いごとを字配りに気をつけて書いてみたり、文字や行の中心の学習のあとに、俳句や短歌を中心に気をつけて筆ペンで書いてみたりすることも取り入れてみた。このように、日常の学習に結び付いた書写活動につなげていくことによって、一層の定着を図り、児童の取り組みも意欲的になったと思われる。

3 中学校分科会

授業で書く文字の量が増える中学校においては、書写の学習で身に付けた力を日常の書写活動に生かすことが、指導の主眼となってくる。そのため書写の学習では、硬筆を使った学習を中心にした授業展開の方が、より効果的に日常化が図れるのではないかという思いが当初はあった。しかしながら、研究を進める過程で我々自身が毛筆の利点の再確認をしたことから、生徒たちにも毛筆を用いて書写の学習をする意味を体感させ、理解させたいと考えるようになった。学習の基準や自分の文字の問題点は、硬筆よりも毛筆の方がとらえやすい。そのことは、授業を通して生徒たちも徐々に感じるようになってきた。そこで、日常生活において毛筆を使う機会がほとんどなくなってきた今、あえて毛筆を中心にした授業展開や指導を意識的に取り入れて、主題に迫るために以下のような工夫をした。

(1) 自ら課題を見つけるために

① 毛筆による試し書き

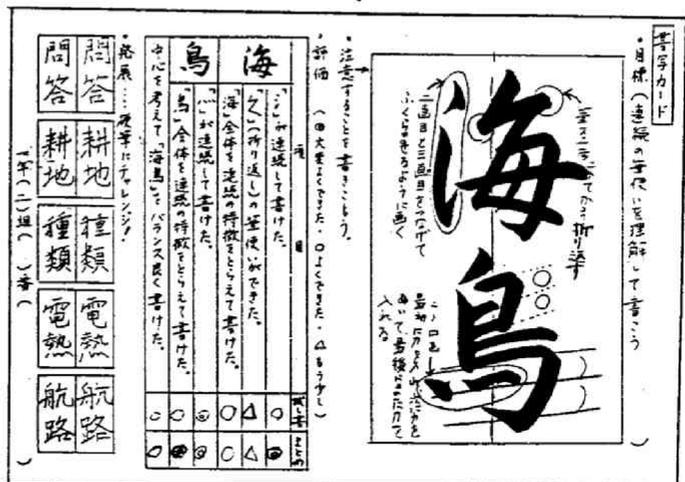
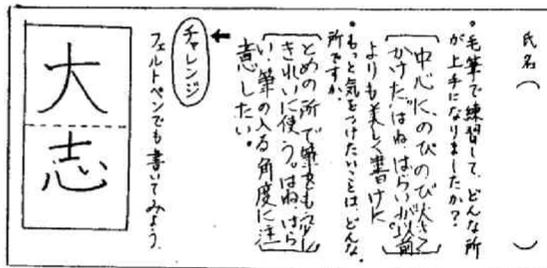
硬筆による試し書きから自分の問題点を見つけた後、毛筆で練習して、まとめとしてもう一度硬筆で書く、という「硬筆→毛筆→硬筆」の授業の流れは、書写の日常化を考えれば有効であったが、指導時間が不足しがちなことと、硬筆では自分の問題点に気づきにくいことが反省としてあげられた。そこで試し書きは毛筆で行い、そこから課題を探し、さらに練習した成果であるまとめ書き（毛筆）と比較して自己評価し、発展学習として硬筆の練習を取り入れ日常化を図る、という「毛筆→毛筆→硬筆」の授業展開に変更することにした。この時目標を1つか2

つにしぼり、その目標に沿って練習・評価がなされるようにした。この焦点化によって、生徒がじっくり自分の課題を見つける時間を確保するゆとりができた。

② 文字の類型化による教材文字の選定

中学校で初めて学習する行書は、類型別（丸み・連続・変化・省略）に分類した。これによって、現在使用している教科書に限らず、広い範囲からより目標を達成しやすい教材文字を選択できるようにした。行書の導入としての単元では、生徒が「丸み」と「連続」の二つの行書の特徴を理解でき、同じ筆使いで上下2文字が練習できる教材として、「自由」を選んだ。

【「書写カード」の工夫】



(2) 主体的に取り組むために

① 「書写カード」の工夫

初めはまとめ書きの下に糊付けして掲示できる小さいカードを考えたのだが、試行錯誤の中で、生徒が授業の流れを自分で確かめられるカードへと改良していった。

② 練習用紙の工夫

ア 試し書きから自分の問題点を見つけ、それに応じて練習用紙を選ぶようにした。その際、練習用紙を選ぶ基準をあらかじめ明確にしておき、さらに個別に机間指導して、目的に合った練習ができるようにした。

イ 練習用紙は、単元の目標に沿ったものを準備した。内容は、部分練習が中心のものとして文字全体をとらえるものとして、さらに、籠書き・骨書き・補助線・始筆の位置等の学習段階も踏まえるようにした。

ウ 自作の練習用紙も取り入れてみたが、作成に時間がとられ、練習時間が少なくなる点が今後の課題である。

③ 評価の工夫

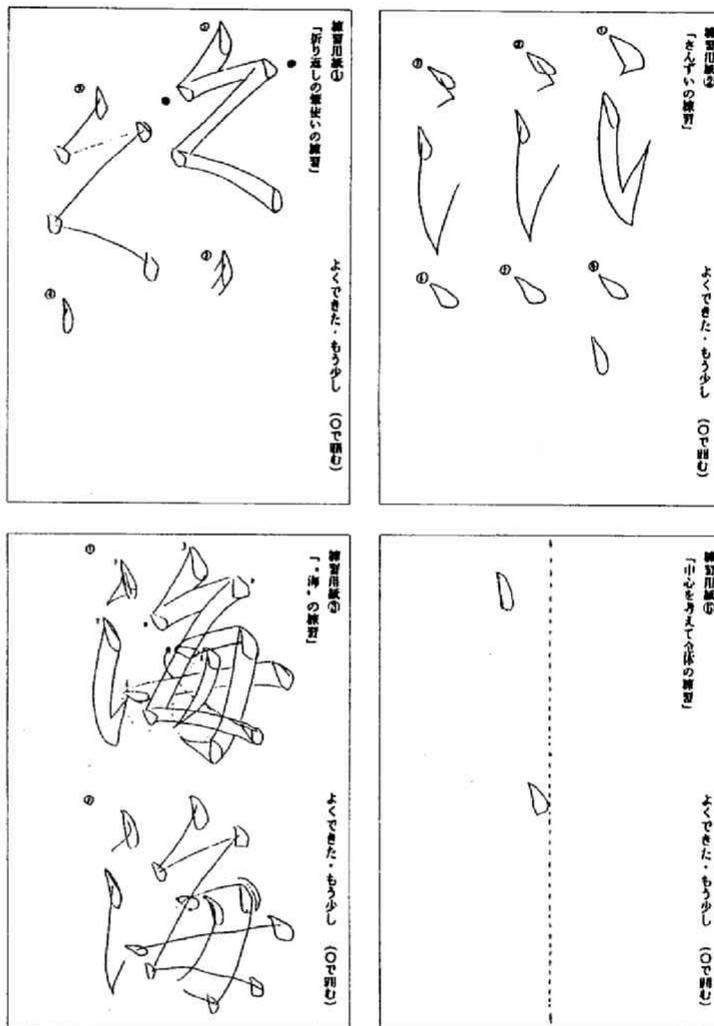
ア 「書写カード」の評価欄を使って、ねらいや学習の基準を確認しながら自己評価ができるようにした。

イ 赤ペンで問題点をチェックしたり、自分の課題を解決できた所にシールを貼る等、作業を通しての自己評価を取り入れ、意欲的に学習できるようにした。

ウ 相互評価も取り入れた。グループで互いの書いたものを評価し合ったり、何人かの書いたものを前に掲示して互いに評価し合ったりすることで、授業に活気が出た。

エ 練習用紙にも評価欄を設けて、一枚一枚を大切に練習できるように工夫した。

【練習用紙例】

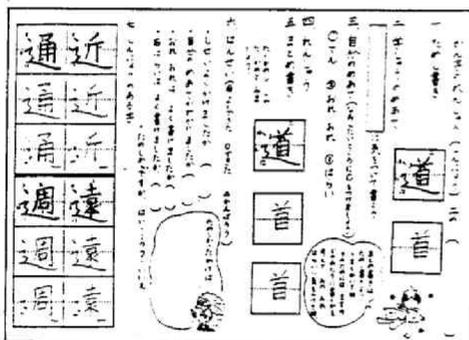


4 「書写カード」

当初は、多面的な評価をするためのカードを意図したが、改善を加えるうちに、「書写カード」という名称で、多様に使えるものとなった。「書写カード」の項目については、検討するうちに必ず入れるもの、ねらいや内容によって使うもの、学年の発達により変えるものがあることが分かった。そこで、学習のめあて、自分の課題、自己評価（相互評価）は必ず入れることとし、さらに価値のあるものになるように工夫した。

初めはどの学習にも使えるものを作成しようとしたが、ねらいと児童・生徒の実態に合わせた方が効果的であると考え、試行錯誤を繰り返した。その結果、授業の流れの中では次のような活用ができた。

学 習 活 動	「書写カード」の活用
○教材文字を知る。	・「書写カード」に書く。（硬筆）
○試し書きをする。	・めあてをカードに書くことで明確化する。
○学習のめあてをつかむ。	・「書写カード」の教材文字に線を入れるなどの方法で学習の基準に気づく。
○学習の基準を知る。	・基準に照らして試し書きを見直し、自分の課題をつかみ「書写カード」に記入する。
○課題をつかむ。	・「書写カード」に練習する。（硬筆）
○課題にそって練習する。	・試し書きと比べやすいように「書写カード」に書く。（硬筆）
○まとめ書きをする。	・課題をもとに、試し書きと比べ、成果を確かめる。
○自己評価（相互評価）する。	・感想や次の課題を書く。教師の評価や励ましを書く。
○発展学習をする。	・同じ部分のある文字や語句などを書く。



「かん字のれんしゅう」

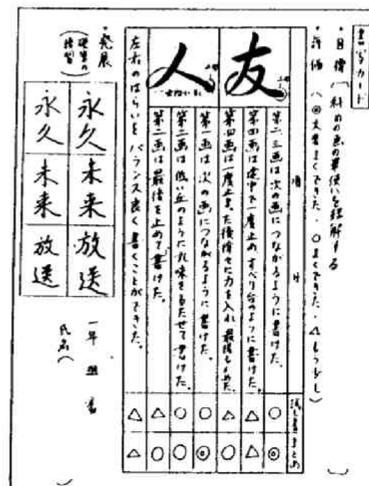
・小学校二年生



「情報」

・小学校六年生

組み立て筆順



・中学校一年行書

5 練習用紙

限られた時間のなかで効果的な学習をするには、既習の学習を生かし焦点をしばった練習を重ねていくことが大切である。課題にあった練習用紙の作成が有効な手立てとなると考え、作成の要点を学びながら試行錯誤をくり返した。

(1) 練習用紙の作成に当たり気をつけたこと

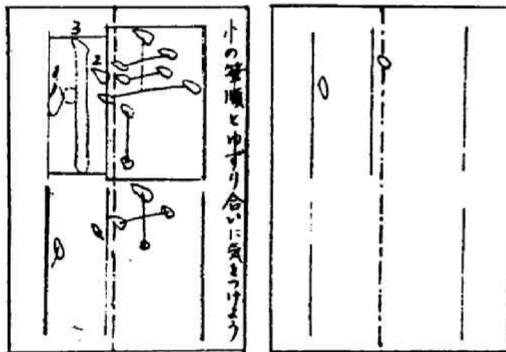
- ・学習の基準に基づいた練習用紙を作成し、課題に合わせて使用した。
- ・練習用紙にねらいを書き入れ、はっきりさせた。
- ・最終的には白紙に書けるように、やさしいものから段階的に練習できるようにした。
- ・補助線や番号、注意書きなどを入れて、字形や筆順、筆使いなどを分かりやすくした。
- ・課題にあった練習用紙を選択させ、繰り返し同じ練習ができるようにした。
- ・必要に応じて評価欄を入れた。
- ・筆使いなどの部分練習用紙を常時用意し、必要に応じて補助的に使えるようにした。
- ・小学校5・6年でも練習用紙の自作を試みた。

(2) 練習用紙の使用に当たり気をつけたこと

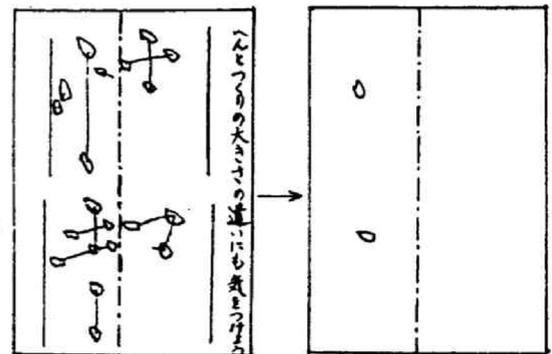
- ・課題にあった練習用紙が選択できるように、用紙ごとのねらいをつかませる。
- ・自己批正をしながら次へ進めるような方法も取り入れた。
- ・適切な用紙の選択や練習について、支援する。

練習用紙を使ったことにより苦手意識を持っていた児童・生徒も意欲的に学習に取り組めるようになった。また、焦点をしばった練習は、課題解決がしやすく有効であった。今後は、個々の課題にあった練習用紙の作成や使い方について研究を深める必要がある。

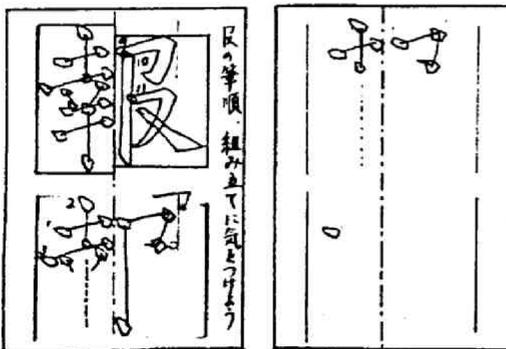
「情」の組み立て



第6学年 組み立て 「情報」



「報」の組み立て



IV 実践事例

<小学校低学年>

- 1 単元名 かん字のかきかた
- 2 教材 「道」
- 3 単元設定の理由

(1) 児童の書写の実態

第1学年からの持ち上がりの学級である。国語科のみならず、すべての活動の中で文字の指導を行っている。特に、終筆における、とめ・はね・はらいや、中心を考えて字形の整った正しい文字を書くことに、注意させている。

しかし、個人差が大きく指導した内容が定着せずに、自分なりの文字を書き続ける児童もいる。また、集中力が持続せず、丁寧に書けない児童や文字を書くことに時間のかかる児童もいる。

第2学年になって、70字(160字中)くらいの新しい漢字を学習したが、間違いや字形の乱れが特に目立ったのは、しんにようのある文字であった。これらの文字は、児童にとって、使用頻度の高い文字でもある。そのため、難しさを克服して、字形を整えて、楽しく、2年生なりに書ける方法はないかと考えた。

意識調査 H7. 6. 20実施 2年2組 35名 質問紙法

・書写は好きですか？

好き	27人	わけ	うまくなるから	7人
			なぞるのが好き	6人
			ペン書きがおもしろい	3人
			おぼえられる	2人
			その他	9人
きらい	8人	わけ	むずかしい	3人
			その他	5人

・自分の字をどう思いますか？

きれい 1人 ふつう 27人 ざつ 7人

・いつも正しくていねいに書こうとしていますか？

はい 19人 少ししている 11人 いいえ 5人

・正しいしせいで文字を書いていますか？

はい 13人 いいえ 22人

・どこをなおして書けばよいかわかりますか？

はい 16人 いいえ 19人

(2) 書写指導の系統

第2学年の指導内容として

ア 姿勢や用具の持ち方を正しくして書くこと

イ 文字の形に注意して、筆順に従って丁寧に書くこと

ウ 点画の接し方・交わり方・方向などに注意して文字を正しく書くこと

と、示されている。第2学年ともなると、学校生活にも慣れてくる。また、物事について細かく受けとめる能力も備わってくる。そこで、第1学年の内容をも考えあわせながら、点画に注意して文字を正しく書く能力、態度を養っていききたい。

(3) 研究主題との関連

① 硬筆と毛筆との関連

・字形を整える上での要素を、教師が毛筆を使って大きく示すことによって、児童に感覚的・視覚的にとらえさせる。文字を大きく書くので、細部の書き方をはっきり理解させることができる。

・毛筆は、硬筆による書写の能力の基礎という観点から、筆使いが大切であると考え。

2年生では、絵筆を使って、始筆・送筆・終筆・右はらい・左はらいなどを指導した。

・使用する筆記具は、鉛筆よりやわらかい硬毛ペンを使用した。基本点画を表現しやすいので、意識し、緊張感を持って文字を書くことができると考えた。

② 気づかせる学習活動の展開

・点・おれ・はらいに関して、適否が明らかな文字を提示し、視覚的に訴える。

・しんにようを三つの点画（てん・おれおれ・右はらい）に分け、正しく整えた文字を書くための基準を明らかにした。

③ 指導の重点化

・しんにようを音声化することで、書く過程を少しでも分かりやすく楽しいものにする。

ア  てん（ウン）

イ  ななめ上に短く（オレ）

少しななめ下に短く（オレ）

ウ  かさねて おり返して

ひくい すべり台を（スートン・スッ）

④ 教材の工夫

・「書写カード」には、めあて・試し書き・まとめ書き・自己評価・発展などを取り入れ自分のめあてが分かり、見通しを持って主体的に取り組めるようにした。

・自分のめあてにあった色別の練習用紙を選択し、練習することにより、自分のめあてに向かって課題を解決しようとする意欲を高め、積極的に目標を達成するよう工夫した。

4 単元の目標

・文字の点画・画の長さ・おれなどに気をつけて書くことができる。

・文字の中心や形に気をつけて、正しく整えて書くことができる。

5 指導計画（7時間扱い）

第一次 はらい・はね・おれ・曲がりに気をつけて書く。（3時間）……本時1 / 7

第二次 画の長さ、間隔に気をつけて文章を書く。（2時間）

第三次 文字の中心、形に気をつけて書く。（2時間）

6 本時の指導

(1) 目標

- ・自分のめあてを持って、丁寧に書こうとする。
- ・おれ、右はらいに気をつけて、しんじょうを書くことができる。

(2) 展開

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	主 題 と の 関 連
と ら え る	1 教材文字を知る。 「道」	・正しい道具の持ち方，姿勢を意識させる。	・「道」の文字カード
	2 試し書きをする。	・硬毛ペンで，試し書きをさせる。 ・前時まで書いた児童の文字の中から拡大したのを見せ，正しく書くには何に気をつけたらよいか発表させる。	・硬毛ペン ・「書写カード」 ・児童の文字をまねて毛筆で大きく書き，適否に気づかせる。
	3 めあてをつかむ。 おれ・右はらいに 気をつけて 書こう。		
	4 なぞり書きをする。	・「道」の文字カードを配り，絵筆でなぞり書きをすることにより，おれ・右はらいを強く意識させる。 ・筆順の確認をさせながら，なぞり書きをさせる。	・児童が絵筆を使って，水をつけて黒板に書く。
	5 学習の基準を知る。	・三つの基準を音声化によってとらえさせる。 、 (てん・ウン) 3 (オレ・オレ) 〜 (スートン・スッ)	・教師が示範する。 ・児童のめあてが適切かどうか確かめる。
	6 自分のめあてを持つ。	・自分のめあてにあった練習用紙を選ばせる。	・色別練習用紙
確 か め る	7 自分のめあてにそって練習する。	・時間を決めて集中して取り組ませる。 ・机間指導及び個別指導をする。	
	8 まとめ書きをする。	・めあてを再認識し，自信を持たせて書かせる。	・確かめシートで調べさせる。
	9 自己評価をする。		・自己評価
広 げ る	10 発展学習をする。	・しんじょうのある文字を書く。 (近・遠・道・通・週)	・次時に扱う。

(3) 評価

- ・自分のめあてを持って、丁寧に書いたか。
- ・おれ、右はらいに気をつけて、しんじょうを書くことができたか。

7 考察

- ・児童の実態から、しんじょうのある文字を教材文字にしたことで、文字に関心を持たせたり、考えさせたりする機会を与えられた。教材文字を吟味することの大切さが分かった。
 - ・学習の基準を明らかにすることで、自分の課題をつかみやすかった。
 - ・教師が事前に児童の課題を把握し、児童の自分の課題と照らし合わせたので、効果的な指導ができた。
 - ・練習用紙は、課題別に色分けして、選択できるようにした。自分の課題にあったものを選ぶことで主体的に取り組めた。音声化して、ゆっくりと書かせるとさらによかった。
 - ・自己評価では、確かめシートを用いたので、自分の文字を評価しやすかった。自己評価の力をつけていくことは、自分の課題を見つけるもとなので、今後とも継続的に指導していきたい。また、教師による評価は、さらに工夫し、児童の意欲がわくものにするのが大切である。
 - ・発展学習は、日常に生かす書写指導ということで、今後も工夫していく必要がある。
 - ・硬毛ペンの活用により、とめ・おれ・はらいなどの意識を促すことができた。
- 硬筆で指導しにくいところでも毛筆を用いることにより、容易に指導することができるので、2年生では絵筆を用いた。3年生への毛筆指導につながると考えた。



<小学校高学年>

- 1 単元名 文字の中心
- 2 教材 「土星」
- 3 単元設定の理由

第4学年の書写指導の内容として、硬筆では一字の字形から文字群の問題「文字の組み立て方、大きさ、配列」等に焦点をしばり、毛筆では一字の部分的関係「画の接し方・交わり方・方向・文字の中心・画間」等を中心に指導することとしている。

児童は文字の中心に気をつけて書くとき、文字のどの点画を中心にしたらよいか迷うことがある。それが行の中心の取り方にまで困難を及ぼしている。対称的な構造をもつ文字では、中心を文字の対称軸として考えれば字形が整えやすいが、そうでない文字では、よく中心を見定めて書かなければならない。

このことにより、中心線を手がかりにしなが、文字の中心となる点画を見出し、字形を整えて書く能力を養いたいと考え、本単元を設定した。

(1) 自ら課題を見つけるための工夫

- ① 学習の基準を明確に把握させるために、実物投影機を使い、児童が視覚的に捉えることができるようにする。
- ② 教材文字と自分の文字を比較させるために、「書写カード」に書き込みを行う。

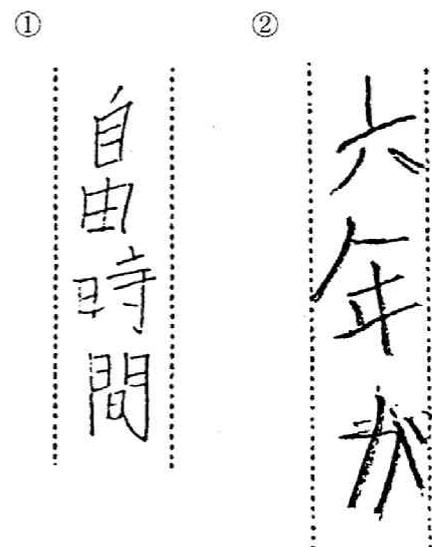
(2) 主体的に取り組むための工夫

- ① 「書写カード」を使い学習の基準を意識しながら取り組めるようにする。
- ② 学習課題別の練習用紙を用意し、児童が自ら選択して使えるようにする。
- ③ 自己批正を取り入れ、学習の習熟の程度にあわせて、課題解決的な学習を進められるようにする。

4 児童の実態

児童は、読みやすい文字を書きたいと思っている。しかし、一つ一つの文字の中心にくる点画を意識して書いているわけではないので、思うような文字を書くことができない。

例えば、右の①の様に、丁寧に書いてはいるが、中心にくるべき点画が中心線からずれているため、左右に片寄ってしまう文字、また、②の様に、縦画が真っすぐ引けないため字形が崩れている文字など、様々である。この学年になると、日常使用するノート類へ、一度に書写する量も多くなり、しかも、縦書きの時や横書きの時など条件も一定しない。また、速く書こうとすることにとらわれ、書き方が雑になるといった字形の乱れが目立ち、中心に気を付けて文字を書くという気持ちが持ちにくくなっているように思える。



そこで、毛筆による学習で、文字には中心になる点画があるということを再認識し、用紙の中心線を手がかりにしながら、字形を整え正しく書くことの大切さを理解させたい。

5 単元の目標

- ・自己の課題を持ち、進んで学習することができる。
- ・文字の中心に気をつけて書くことができる。

6 指導計画

第1時 文字の中心に気をつけて、「星」を毛筆で書く。(本時)

第2時 文字の中心に気をつけて、「土星」を毛筆で書く。

第3時 文字の中心となる点や画に気をつけて、文字や語句を硬筆で書く。

7 本時の指導

(1) 目標

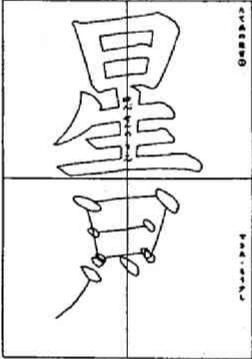
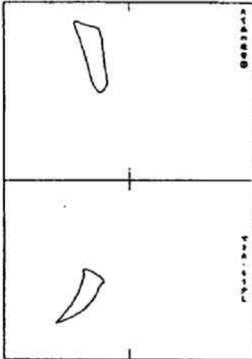
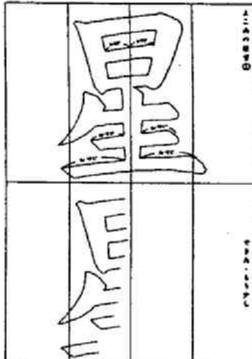
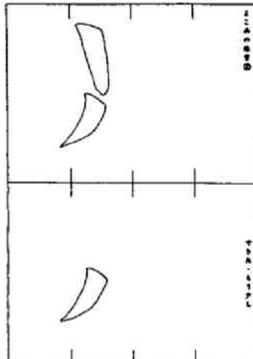
- ・自分の課題を見つけ、意欲的に学習することができる。
- ・文字の中心に気をつけて「星」を書くことができる。

(2) 展開

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	主 題 と の 関 連
と ら え る	1 教材文字を知る。 「土星」		
	2 学習のめあてを知る。		
	文字の中心に気をつけて書く。		
	3 試し書きをする。 「星」	<ul style="list-style-type: none"> ・筆順を確かめながら1枚書くよう指示する。 	
	4 「星」の学習の基準を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・「書写カード」を配る。 ・教材文字に印を付けるなど、具体的に理解できるように助言する。 ・示範し、筆使いや、既習の内容にも注意が向くよう配慮する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・基準が明確になることで、課題が見つけやすくなる。 ・学習の基準を児童の発言をもとに提示することで、学習意欲がわく。
	① 第七画が中心にくる。		
	② 横画は中心からの左右の長さが同じ。		



《書き込みをする児童》

確 か め る	5 学習の基準の中から自分の課題を選ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> ・基準に照らし、試し書きを見直すよう助言する。 ・適切な課題を選択できるよう支援する。 	・課題の意識化を図る。
	6 課題に沿った練習用紙を選び、練習する。 《練習用紙》 縦画の練習① 縦画の練習② 横画の練習① 横画の練習②	<ul style="list-style-type: none"> ・課題別の練習用紙を用意し、その使用法を説明する。 ・自己批評しながら練習を続けるよう助言する。 ・習熟度により新しい課題も選択できるように配慮する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題別の練習用紙を使い、課題を解決しやすくする。 ・習熟度に合わせ練習することで関心・意欲を高める。
	   		
ま と め	7 まとめ書きをする。 「星」	・学習の基準に気をつけるように助言する。	
	8 自己評価をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・試し書きと比較して、成果を確かめるよう助言する。 ・めあてを達成できた児童の文字を紹介する。 	・達成感を味わわせ文字に対する興味関心を持たせる。
	9 次時の学習内容を知る。	・次時へのめあてを持つよう助言する。	

(3) 評価

- ・自分の課題を見つけ、意欲的に学習することができたか。
- ・文字の中心に気をつけて「星」を書くことができたか。

8 考察

(1) 視聴覚機器の活用について

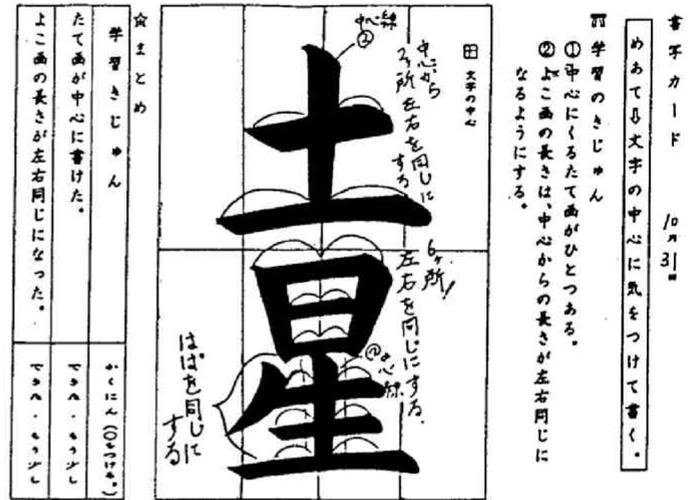
実物投影機を使って学習の基準を知らせた。OHPと異なり、教材文字がテレビに鮮明に映ったり、示範では、手元や穂先の通る様子がはっきりと映し出されたりするなど、効果的であった。興味・関心を喚起させるということにおいても有効な手段であった。今後も、様々な場面での効果的な活用について研究する必要がある。

(2) 「書写カード」について

児童が自己の課題を選択し、意欲的に学習を続けることができるように、「書写カード」を作成した。

教材文字を入れ、児童が自ら赤ペンで学習の基準を確認できるようにした。その結果具体的に理解できたように思える。

教材文字をのせたため、書写カードのサイズが大きく（B4判）なり、机の上に置きづらくなったので、教材文字を書写カードの左右どちらかに寄せ、2つに折れるような工夫が必要であった。



(3) 練習用紙について



(実物投影機に映した文字)

課題別練習用紙を学習の基準別に2種類、各段階別2枚、計4枚を用意した。①・②と練習を重ねると課題を達成できるようにした。このことで、児童は、課題に対して丁寧な取組ができたように思う。

どの練習用紙にも自己批評の欄を設けたので、課題に対する意識も持続できた。自己の習熟の度合いによって個別に学習を進めることができ、興味・関心を持続させることもできた。

(4) 評価について

一枚練習するごとに自己批評を取り入れた結果、成果を確かめながら練習ができ、課題を達成しやすくなった。まとめ書きの自己評価では、多くの児童が達成感を味わっていた。

<中学校 第1学年>

1 単元名 行書

2 教材 「自由」

3 単元設定の理由

読みやすく整った字を速く書きたいという生徒の希望は強い。一方、日常生活においては、多くの生徒が楷書を用いており、行書を意識して用いている生徒は少ない。そこで、行書は、草書の速書性と楷書の明確性という二つの長所をあわせ持つ便利な書体であるということを確認させ、行書を日常生活に取り入れるためのきっかけとして本単元を設定した。

生徒は行書について学習するのが初めてなので、生徒の行書に対する興味・関心を引き起こし、意識を高める導入を考えた。また、研究主題に迫るための手立てとして行書の特徴と意義について理解させ、導入にふさわしい教材文字を選定したり、各自の課題にあうような練習用紙を作成したりした。

4 単元の目標

行書の特徴を知って、日常生活に取り入れる姿勢を育てる。

- ① 点や画の形が丸みを帯びる場合がある。
- ② 点や画の方向、止めや払いの形が変わる場合がある。
- ③ 点画の連続、省略がある。
- ④ 筆順が変わることがある。
- ⑤ 楷書に比べ、速く書くことができる。

5 生徒の実態

1学期の書写の授業では楷書を取り上げたが、硬・毛筆両方ともまだまだ未熟さが残り、なかなか整った文字が書けない生徒が多数を占めるという実態がある。また、点画の基本も必ずしも十分ではない状態なので、行書の入門期を授業でどのように扱うかは大きな課題である。しかし、生徒たちには素直に新しいものへ取り掛かろうとする好ましい姿勢が見られる。したがって書写の授業においては、そうした生徒の学習への意欲を生かして行書の正しい使い方を学習させ、学んだ事柄を日常生活で生かせる能力を生徒に身に付けさせるよう努力した。

6 指導計画

第1時 行書の「丸み」・「連続」といった特徴を理解する。(本時)

第2時 前時の学習を深め、発展として硬筆の練習をする。

第3・4時 行書の「払い」の形を理解し、発展として硬筆でも練習する。……「友人」

第5・6時 行書の「省略」を理解し、発展として硬筆でも練習する。……「平和」

第7・8時 行書の「筆順の変化」を理解し、硬筆でも練習する。……「紅葉の秋」

7 本時の指導（8時間扱いの1時間目）

(1) 目標

- ・「丸み」，「連続」といった行書の特徴を理解して書ける。
- ・行書の縦画や横画の筆づかいを理解して書ける。
- ・自分の文字，友人の文字に対して適切に評価できる。

(2) 展開

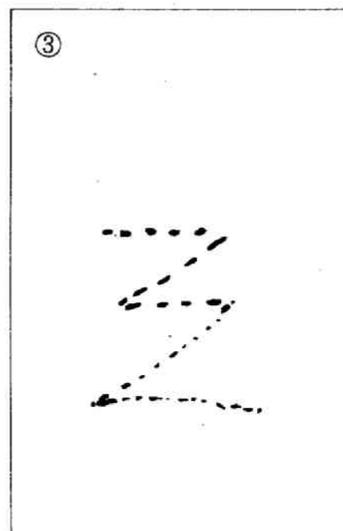
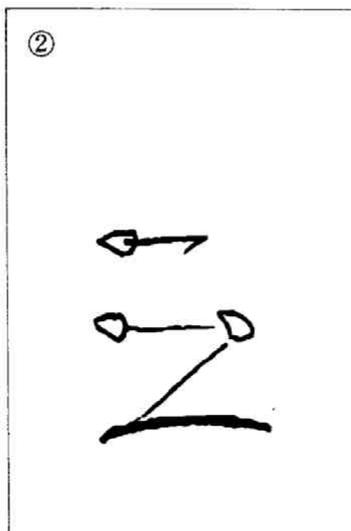
	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	主 題 と の 関 連
と ら え る	1 行書の特徴をつかむ。	・楷書と行書で書いた文字を見せて，その特徴に気づかせる。	・行書に対する興味・関心を高め意欲を持たせる。
	2 行書の特徴について理解する。	・点画の丸みや連続・省略・止め・払いの形・筆順の変化などの特徴を発見するために，画用紙に書いた文字を黒板に並べ，確認させる。	・主体的に活発な発言をさせる。
	3 教材文字を知り，学習の目標をつかむ。	・教材文字「自由」をよく見て考え，「書写カード」に目標を記入させる。	
	点 画 の 丸 み ・ 連 続 に 注 意 し て 書 こ う 。		
	4 指導者による示範を見る。	・筆順，筆づかいをみせる。	
	5 試し書きをする。	・半紙を用いる。	
	6 学習の基準を知る。	・丸味，連続の特徴をつかむために，文字の基準を明確にとらえさせる。	
	7 試し書きの中から自分の課題を見つける。		・課題解決の方法を予測させる。
	8 自分の課題にそって練習する。	・それぞれの課題にあった練習用紙を選ばせる。	・課題解決への方針を立てさせる。

確 か め る	9 まとめ書きをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の基準を再確認し丁寧にかける。 	
	10 相互評価をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・男女各一名ずつ前に出て、丸み・連続がうまく書けたか全員で評価させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相互→自己評価により批評力を高める。
	11 自己評価をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で学習の基準どおり書けたと思うところにシールをつけさせ、目標を達成できたか確かめさせる。 ・「書写カード」に記入させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の成果を認めることにより、さらに意欲を高めることになる。
広 げ る	12 発展学習をする。	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の内容から、硬筆にも生かせることを理解し練習させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活に生かす態度を養う。
	13 次時の予告を聞く。		

(3) 評価

- ・「丸み」，「連続」といった行書の特徴を理解して書けたか。
- ・行書の縦画や横画の筆づかいを理解して書けたか。
- ・自分の文字，友人の文字に対して適切に評価できたか。

○ 練習用紙の例



8 考察

(1) 教材文字について

行書学習の一時間目として、行書の特徴が最も分かりやすい「丸味」と「連続」の2点にしばって学習することにし、教材文字選定に取り組んだ。「自由」という文字を選定したが、もっと入門期にふさわしい教材文字があるかどうか、文字の選定もこれからの課題の一つである。

なお行書の学習を日常に生かすためにも、連続して速く書ける硬筆によるノート指導など、発展学習にも広げていきたい。

(2) 導入について

点画の丸味や連続・省略・払いの形など、画用紙にあらかじめ書いた拡大文字を黒板に張って提示したところ生徒の興味・関心を高め、楷書と行書の違いを容易に理解することができた。

(3) 示範について

筆を用いての示範（水書板に和紙をはり一号筆を使用）は、墨が垂れるなど水書板を立てかける角度がむずかしいが、筆勢、書き順などを示す場合に効果があった。

(4) 練習用紙について

籠書き・骨書き・始筆の位置・部分練習など課題別に用意し生徒に選ばせた。さらに、行書のリズム感について学習させるための練習用紙の工夫も必要と思われる。

(5) 相互評価について

男女各1名ずつ前に出て、丸味・連続がねらいどおり書けたか評価させた。他の生徒の文字を自分の文字と比べることにより、評価する力を持たせ、主体的な自己評価へと進めることができた。

(6) 自己評価について

赤いシール、青いシールを各自に持たせ、丸味・連続が正しくできたところに貼らせた。この方法は、生徒の興味・関心をひき、本時の目標を達成するうえで有効であった。

(7) 単元終了後の変容

行書に慣れるにしたがって、授業中に文字を書く速度が増し、ノートに縦書きの場合、行書を使用する回数が増えた。また、きちんとした行書を教えたことにより、文字の乱れが減ってきている。まだ十分とは言えないがこれからの指導によって、行書を日常生活に生かしていけるのではないかと考えられる。

V 研究のまとめと今後の課題

今年度の研究課題「自ら課題を見つけ、主体的に取り組むための書写指導法の研究」に基づいて、それぞれの実践と研究討議を重ねてきた。

児童、生徒の学習意欲を高めるための指導を目指した研究の成果は、以下のとおりである。

- (1) 適切な教材文字の選定と学習の基準を明確にすることは、児童・生徒が自ら課題を見つけるうえで有効であることが確かめられた。
- (2) 事前の実態調査をもとに、学習の目標を求めることの有効性も再確認できた。
- (3) 低学年においては、触る・音声化・動作化など体感を通して理解するよう工夫をした。
- (4) 学習の基準を明確にするため、視聴覚機器（ビデオ・実物投影機・OHP）、教具（拡大文字・分解文字）の活用の工夫をした。
- (5) 課題別に練習用紙を工夫したことにより、個々の課題解決に主体的に取り組ませることができた。
- (6) 低学年では「確かめシート」等により、自己評価をすることができた。小学校高学年・中学校では相互評価を取り入れるなど、評価活動の工夫によって主体的な学習態度を養うことができた。
- (7) 発展学習の効果として、他の文字への応用、硬筆での書写にも生かそうとする意欲が高まった。
- (8) 小・中学校の連携による系統的な単元及び指導法の確立が重要であることが分かった。
- (9) 「書写カード」は、教材文字の選択をもとに必要項目をしぼることで、使用の効果をあげることができた。

なお今後の課題としては、

- (1) 引き続き自ら課題を見つけ意欲的に活動する児童・生徒を育てる指導法の研究と、教材文字の系統化が必要であること。
- (2) 毛筆での学習を日常の書写に関連させる場合、よりよい筆記用具の研究を進める必要があること。（例：絵筆、硬毛ペン、フェルトペン等）
- (3) 教室以外での書写活動についても工夫し、多目的ホール等の利用についても積極的に検討する必要があること。
- (4) 書写で学習した内容を児童・生徒が日常に生かし発展させていくための継続的な研究が必要であること。
- (5) 硬毛の関連を常に意識し、教材文字の選定・系統化など小・中一貫の指導法の確立が必要であること。
- (6) 児童・生徒の実態を把握して、有効に使える練習用紙の作成が必要であること。
- (7) 書写の授業へのティーム・ティーチングの効果的な導入について研究すること。